

## 「憎むべき荒廃をもたらす者」の正体に迫る

「憎むべき荒廃をもたらす者」については、ダニエル書の8、9、11、12章など、幾つかの箇所に記されています。

福音書の中でも、「世の終わりのしるし」についての預言の中で言及されています。先ずこれらを比較検討してみたいと思います。

「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを・・」(マタイ24:15)  
「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら」(マルコ13:14)  
「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、(ルカ21:20)

マタイとマルコは、ほぼ同様の表現です。

ルカは「荒憎者」に関する表現ではなく、単に「軍隊」としています。

三つを比較すると、「聖なる所＝立ってはならない所＝エルサレム」という捉え方、そしていずれもこの者は人間(軍隊)であるということです。」

しかしダニエル書のこれに付いての描写は、微妙で、イメージしにくい部分があります。

「彼は軍隊を派遣して、砦すなわち聖所を汚し、日ごとの供え物を廃止し、憎むべき荒廃をもたらすものを立てる。」(11:31)

彼(北の王)は「軍隊」を派遣。犠牲を廃止。荒憎物(者)を立てる。

「日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらすものが立てられてから、千二百九十日が定められている。」(12:11)

犠牲を廃止。荒憎物(者)が立てられる。

「日ごとの供え物が廃され、罪が荒廃をもたらし、聖所と万軍とが踏みにじられるというこの幻の出来事」(8:13)

8章の記録は、内容は同様ですが、古代ギリシャの後代に起きる「小さな角」(北の王)に関する描写として、その行動が記されていますが、「憎むべき荒廃をもたらすもの」という類の表現では出てきません。

「都と聖所は次に来る指導者の民によって荒らされる。その終わりには洪水があり終わりまで戦いが続き荒廃は避けられない。彼は一週の間、多くの者と同盟を固め半週でいけにえと献げ物を廃止する。憎むべきものの翼の上に荒廃をもたらすものが座す。そしてついに、定められた破滅が荒廃の上に注がれる。」(ダニエル9:26、27) 新共同訳

一番不可解に思えるのがこの9章の記録です。

「指導者の民」によって「荒らされる」(En: destroy)。犠牲を廃止する。「憎むべきもの」の翼の上に「荒廃をもたらすもの」(En: desolate) が座す。定められた「破滅」が「荒廃」(En: desolate) の上にそそがれる。

原語のヘブライ語には「荒廃」(ヘ語:シャウム)という語は1回しか出てきません。つまり、憎むべき者の上に座すものと、最後に破滅させられる者は同じものです。

それで、口語訳はそれが分かり易いように次のように訳しています。

「荒す者が憎むべき者の翼に乗って来るでしょう。こうしてついにその定まった終りが、その荒す者の上に注がれるのです」。(口語訳)

「日毎の供え物」(常供の犠牲)が、実際の成就の場面で何を指すのか、明確には分かりませんが、「廃止」するのであって、阻止/妨害するという事ではないようです。ダニエル書に記されている表現から言えば、北の王は、多くの者を、聖なる契約から離れさせる、棄教させる事に成功する、と記されていますので、信仰そのもの、あるいは日常的な宗教的慣行を止めさせる(あるいは不要なものと思わせる)と言ったことであろうと考えられます。

9章の表現から言えるのは「荒廃をもたらす」ことをする故に「憎むべき者」とみなされるという事ではなく、「荒廃をもたらすもの」と「憎むべきもの」は別ものだということです。  
「憎むべきものの翼の上に荒廃をもたらすものが座す(乗る)」

この表現から分かるように、実は「憎むべき荒廃をもたらす者」は、二者が合体したもの、すなわち、復興ローマの上に大バビロンが座している状態のことです。

(レポート「85 反キリストは「シリア」、偽預言者は「イラン」であるという根拠」の中の「第5のラッパで登場する「イナゴ」の実体に関する部分を参照して下さい)

その結託は7年の艱難期の始まりと同時か、その直前にそうした明確な盟約が成されるのでしよう。

「翼」の上にとというのは、ローマに保護された(寵愛された)、という意味に違いありません。

「…その翼の下にあなたは避け所を求めてやって来た…」(ルツ 2:12)

詩編の中には同様の言い回しが幾度となく出て来ます。

「…あなたの翼の陰にわたしを隠してくださいませように…」(詩編 17:8)

「…わたしは幾たびあなたの子供たちを集めたいと思ったことでしょう。めんどりがそのひなを翼の下に集めるかのように…」(マタイ 23:37)

また、黙示録の第5のラッパに登場する「イナゴ」は、鉄(ローマを表すのに用いられている)の胸当てを付けています。

「そしてついに、定められた破滅が荒廃の上に注がれる。」

これは、つまり、10本の角が最終的に大バビロンを食い尽くし、滅ぼされるという事を指しているに違いありません。

「また、あなたが見た十本の角とあの獣は、この淫婦を憎み、身に着けた物をはぎ取って裸にし、その肉を食い、火で焼き尽くすであろう。大いなる都、バビロンは、このように荒々しく投げ出され、もはや決して見られない。」(17:16, 18:21)

そして「都と聖所は荒らされる。終わりには洪水があり終わりまで戦いが続き荒廃は避けられない。」

この洪水は、サタンが天から落とされた直後、「女」(エルサレム)を襲う「洪水」のことでしょう。

「蛇は、口から川のように水を女の後ろに吐き出して、女を押し流そうとした。」(黙 12:15)

それで、「憎むべき荒廃をもたらす者」である「復興ローマ+バチカン」が、軍隊（ヨーロッパの連合軍）をエルサレムに送る理由や目的は、分かりませんが、恐らく、鎮圧、制裁、威圧、恫喝といった類の事だろうと思います。

これが、第5のラッパの五ヶ月間の苦しみに相当するものであり、龍のはき出す「洪水」の実体と考えられます。

これに対応して、「地」が救助します。その方法は、「洪水の水を飲み干す」というものです。「蛇は、口から川のように水を女の後ろに吐き出して、女を押し流そうとした。しかし、大地は女を助け、口を開けて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。」（黙 12：15，16）

「川を飲み干す」という表現から、この「洪水攻撃」を仕掛けた「軍隊」が大敗するということであろうと思われます。

ですから、このできごとによって、エルサレムはほとんど無傷を保ちますが、「海側勢力」の現代ローマ軍は、「大地側勢力」のシリア、イランによって壊滅させられると考えられます。実際これは「戦争」です。



そして、恐らく、この戦争による敗北で、復興ローマの10カ国中の3カ国は、連合から、引き抜かれる事になるのでしょう。

これを宗教的背景で表すと、ユダヤ教をイスラームが保護し、キリスト教勢力を打ち負かすという、前代未聞の世界情勢となります。

この結果、イスラエルは、危機的な状況から脱し、「無事だ。安全だ」（テサロニケ第1 5：3）を謳歌することになります。

この戦争の大打撃は、ローマの致命傷と思えるほどになります。

しかし何と、その傷もたちどころに癒え、復活します。

その奇跡的な回復のゆえに、全世界は驚嘆し、どこもこの新連合王国に匹敵するものはなく、とうてい適わないと認めることになります。結果、大多数の人は、これに迎合するようになります。

「この獣の頭の一つが傷つけられて、死んだと思われたが、この致命的な傷も治ってしまった。そこで、全地は驚いてこの獣に服従した。」(黙 13:3)

流れとしては、この後、「荒憎者」が「聖なる所に立つ」ということになります。

「彼は軍隊を派遣して、皆すなわち聖所を汚し、日ごとの供え物を廃止し、憎むべき荒廃をもたらすものを立てる。」(11:31)



それで、「小さな角」(北の王)自身は「荒憎者」ではなく、それを遣わすものであり、この表現から、この時すでに、「小さな角」は第ダニエルの「4番目の獣」に生じた後であり、この獣を牛耳る者になっていることが分かります。

さて、では「憎むべき荒廃をもたらすもの」は、どのように、聖なる所に「立つ／据える」ことになるのでしょうか。

まず、1世紀当時の状況を考えますと、ルカもはっきりと「軍隊が包囲する」と記していることから分かりますように、「復興ローマ+バチカン」の軍隊がエルサレムを包囲することになるでしょう。

このタイミングは、後半の3時半の始まりの時、つまり「大患難」勃発の時となります。

この同じ「荒憎者」は、3年半前に、「洪水」として、登場しましたが、それはまだ、「北の王」が関わる前で、「北の王」は救出者でした。

しかしこの度は、突如、平和条約を破り捨てて、攻撃者として、明確な形で、現れることとなります。

エルサレムの「人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません。」(テサロニケ第1 5:3)

この時点で「荒憎者」は完全に「北の王」と一心同体という状況になっています。

これを描写したものが、黙示録17章に記されている、「大バビロン」を乗せて登場する「緋色の野獣」であり、「第8番目の王」と記されている者でしょう。

